うな海域を南下移動したかは不明である。

6. 日本海西部水域におけるスルメイカの標識放流結果について

名 角 辰 郎 （兵庫水試）

近時この水域ではスルメイカ漁業の急速な伸長にともない、従来の沿岸既成漁場のほか、沖合でも操業される水域が増加しているが、これらはスルメイカの南下、北上群の沖合への拡散、沿岸域への接岸回遊の経路にあたり、移動回遊をみるためにはきわめて重要な位置にある。そこで今回はこれら水域に来遊した冬イカ群（南下交接群）および春期イカ群（産卵前交接群・未成体群）の移動と他水域漁場との関連を知るために標識放流を実施した。放流実施の概要は次のようである。

対象群	放流年月日	放流点数	放流尾数	再捕数
冬 イ カ	1968. 12. 7～ 8	2	1,500	5
春 イ カ	1968. 5. 29～30	2	500	8
	1970. 4. 20～23	11	2,641	30
	1970. 5. 15～16	2	331	4
計		17	4,972	47

なお放流群の性状を知るために外套背長、熟度等の計測、および再捕魚体の計測を一部実施した。得られた結果の概要はつぎのようである。

(1) 冬イカでは17～41日間に対馬～五島近海に移動した。

(2) 春イカでは10～63日間にわたって島根半島、山陰東部、福井・石川西岸へ移動し産卵個体としてとられるもの、68～111日後北海道西岸、68～102日後新隠岐堆～大和堆西部で再捕されるもののほか竹島近海放流のものの中には20～68日後韓国東岸で9尾の再捕がみられ、北上、西行、接岸等多様な行動を示した。

(3) 春イカの移動は産卵接岸といった生理的要因によるほか、放流点の海況、特に水塊配置の型からみて流動等の機会的な要因による面がきわめて多いようであった。

(4) 釣獲される春イカ群には外套背長組成モードで約3群（15cm、18cm、21cm）の未熟、成熟群があるが、放流群と兵庫沿岸再捕個体の計測からみると、その成熟様式は外套長18～19cmぐらいから急速にてんらん腺長が伸長し成熟群化するものと考えられる。

7. 近年の日本海におけるスルメイカの漁獲量について

笠 原 昭 吾 （日 水 研）

日本海のスルメイカ漁獲量——とくに1964年以降——について整備、検討した結果、下記のことがほぼ明らかになった。

(1) 戦後の1952～1963年の本州日本海各地における年間の漁獲量は、20～40千トンの範囲内で変動し、年平均約30千トンであったが、1964～1967年では40千トン前後とやや増加の傾向をたどり、さらに1968年以降は年々急速に増大し、1970年には約125千トンと推定された。

(2) 1968年以降の本州日本海における急速な漁獲量の増大は、福井県以西の西部地区におけるものであり、日本海中央部の沖合漁場の開拓がもっとも大きな要因になっているものと考えられる。

(3) 本州日本海域の漁場を沿岸と沖合に区分し、それら両漁場の1966年以降の漁獲割合をみると、1967年までは沿岸での漁獲が圧倒的に多かったが、1968年には沖合のものが20%前後を占め、1969年には沖合38.7千トン、沿岸32.0千トンとなり、沖合の漁獲比が沿岸のそれを上回っている。

(4) 1955年以降の日本海全体の漁獲量（本州沿岸・沖合、北海道西岸、九州西岸、韓国）における年変動はきわめて大きいが、年々増加の傾向が認められ、ここ10年の間では120～250千トンの範囲内で変動しており、1963、1968両年はいずれも250千トン前後の漁獲量となっており注目される。

(5) 日本海各地区における1970年の推定漁獲量は本州沿岸域59千トン、本州沖合66千トン、北海道西岸56千トン、長崎県25千トンでこれらの合計は206千トン以上となっている。1970年の日本全国のスルメイカ漁獲量は現在のところ約400千トンと推定されるので、その50%程度を日本海漁獲物によって占めたことが特徴的である。

研究推進上の諸問題

全国のスルメイカ研究者または関係試験研究機関が、今後スルメイカの資源と漁況予測の研究にとりくむにあたり重要な問題は多々あるが、特に問題点をしぼらずに自由に意見を出し合った結果、主として提起された問題は次の通りである。

1. 漁期前調査について

漁況予想のために漁期前に来遊資源量の予測の方法（特に北上回遊期における）を確立しなければならないが、それに必要なことは、

(1) 釣漁業によって漁獲される以前の若令イカの分布密度を正しく評価するための採集方法の開発。

(2) 漁期前における各種漁船、調査船によるイカの目視発見情報について、来遊量水準評価のための分布事象の類別。

(3) 漁期前調査の海域、時期、調査体制についての検討。

(4) 漁期前調査を水研、水試が協同で実施するためには計画に見合った予算が必要であるが予算の確保については今後関係機関に折衝することとする。

2. 成熟に関する研究について

スルメイカの資源研究のなかで成長、成熟の研究は、系群構造、移動に関係する群の内的要因、および再生産等の主要な研究分野の基礎となっているが、成熟状態の評価については研究者または研究機関によってその基準がまちまちである。将来は上記の諸問題について特に海区間の関連研究を深める必要が認められるので、成熟についての評価基準と、成長・成熟過程における段階区分の統一について検討を要する。